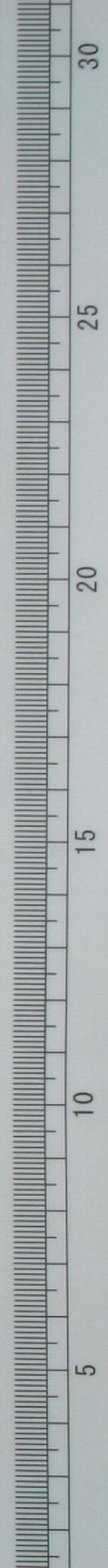


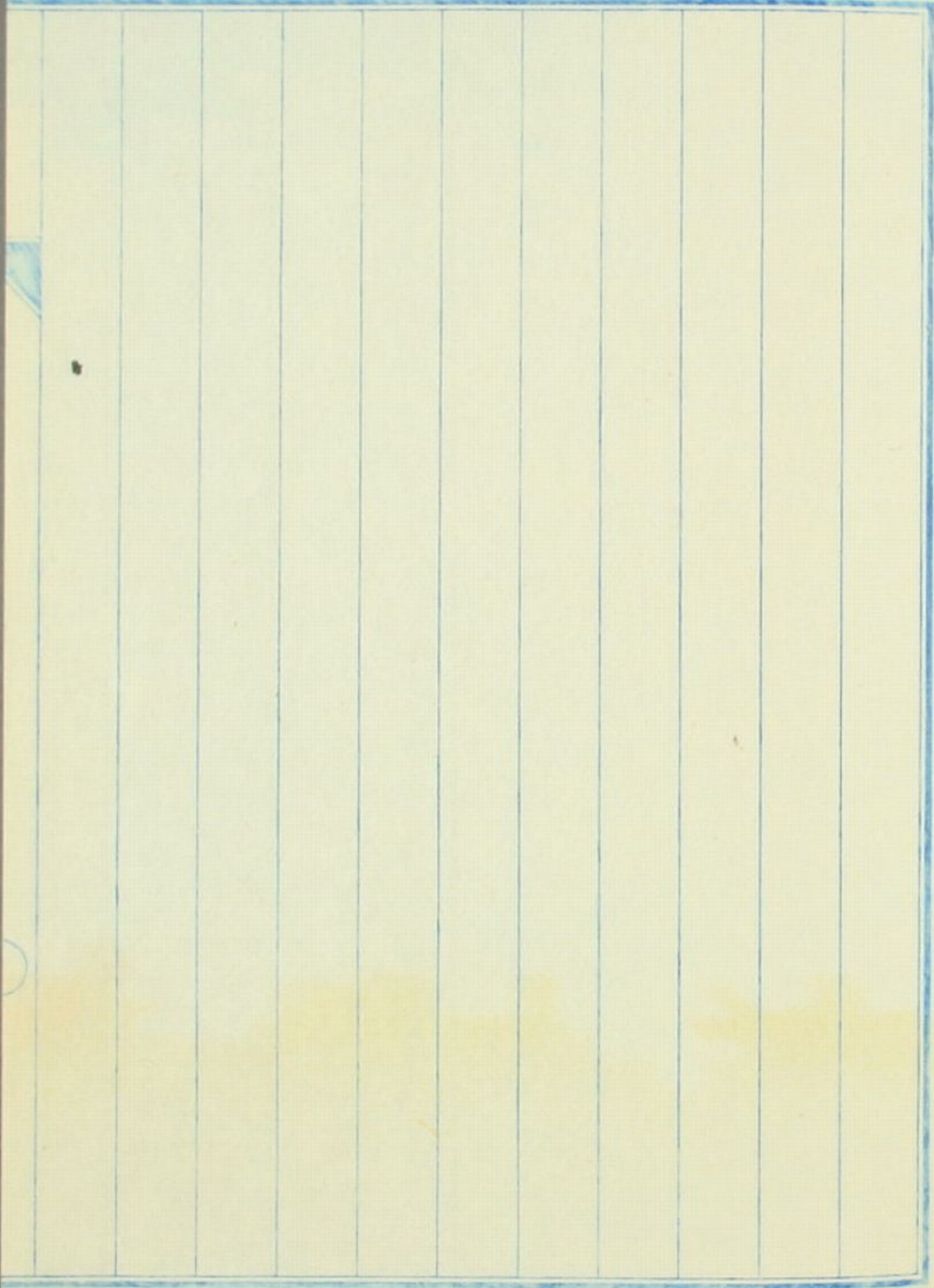
春堂獨語

作庭

五

特別
14
1919
105





14 15
1919 1380
22 22

昭和十六年十月五日
市島謙吉氏贈

一 柳を排斥し、さきさき、あつたふち、二三を柳部に見
 一 ちかや、茶多(ちかや)と書かれ、のま、唐書作敷高を并
 書、唐書、唐の事、の修あり、曰く、柳山ありと、そのを柳
 首、柳誕生、の柳、唐書を志す、と、いつく、其、時、生、湯
 九頭龍王八切、唐書を出し、釋、生、湯、を、漢、院
 也、是、湯、の、也、也、然、う、あ、か、流、の、を、後、柳、を、有
 云、又、唐、凡、り、柳、く、く、の、條、下、ふ、山、あり、茶、多、云、茶、
 雲、就、子、山、も、い、震、且、四、か、い、い、山、の、言、し、も、後、我
 朝、用、の、天、皇、の、神、宇、宇、流、の、王、茅、院、の、作、院、
 其、及、南、都、大、寺、又、も、具、福、存、る、ん、と、い、ふ、言、也、
 也、云、

一 梁山岳、岳、部、上、喜、の、山、の、部、に、梁山、岳、の、部、人、
 生、ふ、人、を、天、に、生、ふ、天、地、を、陰、陽、を、生、ふ、陽、陰、
 二 方、を、生、ふ、云、こ、こ、を、易、を、其、き、と、云、と、云、
 云、

一 増、岡、僧、の、園、方、有、る、石、の、禁、と、後、を、向、く、石、の
 其、を、を、心、を、能、く、相、射、相、生、を、思、ひ、合、え、ま、へ、き、也、
 相、射、と、云、を、木、射、土、土、射、水、水、射、火、火、射、金、金、
 射、木、木、射、土、土、射、火、火、射、水、水、射、土、土、射、水、
 石、を、向、方、を、不、一、の、云、木、射、土、の、故、也、土、性、の、人、其、
 多、也、也、里、石、を、つ、み、を、足、方、を、ま、へ、う、う、土、射、水、
 の、故、也、云、と、云、の、云、を、を、石、を、云、と、云、と、云、

とし樹木を省略し、まづて海濱島嶼の致
 を考ふるに、又、遠路處と稱く狭きも、た一
 程の風波を海わらざるも、是亦自然の景を
 言し、或る山川林岳の小徑を擧げ、又、海濱
 湖邊の意を考ふるも、又、桑を種と稱し、桑を
 處を、一處の處を、あつた、夜路、處と稱する
 者、と大なる事、一、是れ、外、夜路、と内、夜路
 との、あつた、外、夜路、ハ、家の、門、き、待、ん、雪、院、の、
 あつた、ま、る、一、程、の、景、を、海、濱、内、夜路、ハ、中、門、内、を
 手、水、鉢、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 桑、と、稱、す、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 桑、と、稱、す、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、



一處を、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 こと、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 雄偉壯麗なること、溫和秀麗なること、閑雅幽静
 なること、を、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 せ、り、又、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 し、庭、を、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 清、潔、な、り、と、井、の、あ、つ、た、間、甚、だ、鮮、生、と、美、麗、な、り、と、
 又、閑、静、な、り、と、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 枝、を、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 樹、木、の、あ、つ、た、花、を、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、
 一、つ、た、ま、る、と、桑、を、振、り、の、處、と、稱、す、と、桂、桑、の、

高きを本年の月を娛甲しちるるをんハ一月を眺望
の自記を以て二日を園中を遊遊するは閑行に
ほのろくは計あるを要す或ハ其テあるを或ハ
掃あるを、如き遊遊人其を樂ありしと云ふ是る者
るに應ハ又家名と別係を以テ其其指道方
の自記を以て、即チ一宮を觀望するを目の
と云ふあるは寺院前の庭の如きを一寺中を
見出ちるを以て又庭を以て家名を係して
一庭中の景物を以て一庭遊遊の如きと目
と想ふ人もあると云ふある大東二庭を以てその
園係を以て寺院杯を以て其其指道方を以て

心におおむるを以て杯ハ山方或ハ園にありて地を建
築せしむの如き也と云ふ又大庭と小庭の心を
方々改向あり、是ハ寺院杯の庭を以て
大庭を以て、又寺院杯の庭を以て小庭ハ
完備ハ見しむることを心得し全上
一寺遊遊の庭ハ大庭と小庭を以て、其其指道方
の自記を以て、即チ一宮を觀望するを目の
と云ふあるは寺院前の庭の如きを一寺中を
見出ちるを以て又庭を以て家名を係して
一庭中の景物を以て一庭遊遊の如きと目
と想ふ人もあると云ふある大東二庭を以てその
園係を以て寺院杯を以て其其指道方を以て

し又地平地と云ふを以て、其其指道方

程の圖ありを心へし、
一、市中の流ハ生居の畫
其政を修まらん人の心を
作あり（きんぎょ）又、
きま一、市中、
庶民皆一、
程々の故ありも、
二、この体格、

一、素匹と起し、
即ち守復不、
侍を道と、
一、坂垣、

一、

一、
の、
部、
先、
後、
一、
切、
即、

たぐ地面を傾斜せしむし是れ里宮を治む
更なるをゆるしむ方便なり又一里宮の流
れを使ひしむる其傾斜の勾配を
古くはゆるしむるを要す雨風の吐きに
ハ三四七五を流しし地を混入すの事最池
水の吐口の方へ流すをのこす全上

一 庭を治すの順序を前里宮を初め奥の方へ
先(と)進み再びあちこち又奥の方へ中部を
後まると云ふは此の事也此の如くは大村
大木の運搬と配分を不便をなくすべく配分
まじしり大木の順序は右の如く又石垣

を初めより後へ橋を扱ふを順とすも
之れ亦大抵多く初めは扱ふを便しむる
石垣の庭の骨格多く初めは治す法とす
この如く池の水を引くは其の如く山を
治すも此を引くは山を治すの如く
由る事なり是れ初め用ひを要す 全上

一 石の庭中の骨格とす只一石と云ふは庭の
をゆるしむる事なり古式は九石の石を三
つと云ひて四石五石の石を一庭とす也 怨敵
悪鬼を扱ふの義とす此の事なり此の如く佛
説くは十四石五石の石を月一庭切要の

風波を歎すべし、石を佛令丸きの義ありきも
 皇石四ツト玉石五ツト自心と侍くせん、
 中の石法教をたゞし、又古法石の旨律を云
 是又自心と御心と石と御心と、
 配布する石と方しく土地と材料と、
 計のちさし、又古式石の形、
 五個のつちき、
 平石と曲り石と、
 二個、
 古昔の石を大小取難て、
 一古昔の石を大小取難て、

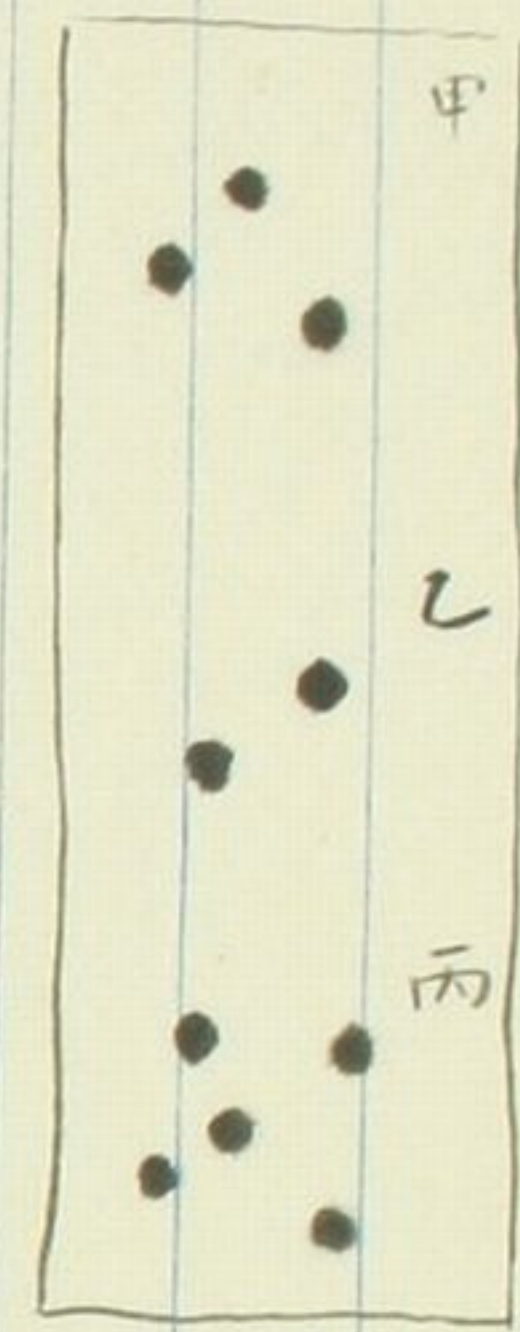
つをたぬ、
 選ぶ、
 下行、

一 梁山、
 玉、
 七我、
 古昔の石、

の十文字と結ぶる石の二文字とを如め石の首に
二次の石を添ふるを云ふ於二の字の如き也 抱石
是二石或る三石を合して一石の用と爲す也、抱石
交るるを好むる三石最難と云、釣石是三叉路
の石より大括大なる者を用て配容と云、椀石是
長き切石等より二石収まる合て好く椀の如き也
長き自然石又一の也、切石と自然石とを人云ふも
又くの也 白石是粉き石印する鹿窟をも用ひ
ぬるも有也 木の切口、是と云ふ良の其根の堅地
處を用しる石ののまきの之を用ゆ大木の切口
ハ踏壇を用じも亦面中し其院不可用 是

是堂塔の敷瓦、又も花園瓦と云ふ、石瓦はよ
り佳し正面の用ありしより路心の縁手道は
四五枚で繕け用ありし、又も花壇も外路
地より一擧げ用をも仕るも何れも、是れ
景の心をききする用也、志なくしく景をうつす
者也、抱石瓦石とのし異なる所、昔瓦
石を茶庭に用るとその人あるは是れ亦茶庭
庭、茶庭に用ひ勿論山ありて茶行せる其
の随も之を用あり、石の刻の如き、従て三
寸を定法より、狭きを庭りて庭を、此の如き
古の法式より、石瓦を庭の縁石の形に、四寸

五ツニツ杯と云ふ、柱杯のぬく正しく頼り別す



不_レの_レさう又_レ中_レ後_レ一本
三_レ元_レ中_レの_レ正_レ三_レ本_レ不_レ
は_レ甲_レの_レぬ_レ二_レ本_レと_レ乙

のぬく二本と丙のぬく枝ありし、利休もぬきを
さうく漸々まききと終くありと云ひ、織部も
ぬきを終くまききを漸々うくすと云く、
ふ、夫々_二現_一ある_二庭_一造_レ法

一山水中谷河_二植_一る_二物_一を_二落_一芝_二草_一此_二草_一菊_二玉_一碧_二花_一芍_二薬_一草_二草_一と_二梅_一子_二柏_一楓_二草_一沈_二下_一花_二丁_一
子_二柵_一蘇_二万_一金_二草_一草_二と_二山_一を_二植_一え_二万_一年_二青_一梅_二草_一、

島山よりある、芝を谷に植る伊吹一八草物等、
ハ山又ハ島を植え、芝草の葉と浮、女即花ハ野
らあし梅のさうと橋本の木とを橋上_二枝_一を出
し又あ_二草_一蔭_二を_一映_レせしむ、漸々とあ_二草_一蔭_二を_一
とを瀧のあ_二雨_一う又と傍_二枝_一の横_二斜_一せし木
を植え、其_二枝_一草_二水_一の中央_二を_一庭_二を_一溝_二布_一の_二と_一
取_レり又_レさ_レを_二植_一え_二と_二山_一路_二の_一腰_二掛_一又と亭
昔_二杯_一の傍_二る_一木_二を_一植_レへ_二其_一蔭_二を_一庭_二上_一及_レす_レへ_レ
之_二を_一庭_二庭_一く_二の_一木_二と_一さ_レあ_二松_一を_二中_一と_二他_一を_二棠_一柿
杯_二何_一も_二も_一良_レし_二土_一手_二又_一掘_レし_二を_一堀_二の_一四_二三_一分_二外_一で
か_レう_二と_一景_二改_一を_二庭_一中_二と_一ある_二松_一を_二良_一と

丁んを植概植おてのさう池邊の木を又上
影を映し夏天涼葉をほく又月夜の方より映
すき影を専らとす 合上

一 概ハ御都より植え初め木を石州より起し南
元ハ桑山太也植へたゆしと云ふ垣の端の杭を漆
ハ樹を植るを垣あめの木と云ふさやを垣と精
同ハ垣の樹を漆ハ植るを油ハ葉を風情
あさるさう枝敷のく小木をのさう修治の後又
ハ侍より木を植あらし武とおさる一樹を植く
其枝終末を述きさうの現方なせると出
開の政あらし是を燈障りの木と云ふ手水鉢

のさく樹を植え鉢のあま影を映すをのさく但し
其扱と多而も一尺二寸位上とあると手水鉢あ
を附とすう木ハ阿波設木錦木南天櫻、葛
年掛ササウ鉢前の墨うら地掛ハ保るある
ハおぬの風政あらしを忌とすし薄葉手水鉢の
鉢法も因しことさう井戸の傍に木を植る概植
杯の中七二三株植へ井筒の道を料のくし一庭や
る扱あき木そのを於終あさらし但し毒を
毒扱をぬく又庭の方角うさうさう木ハ月を
障りあさう縁のまゝあさらし
一 茶室うさう用あさう木うさうえ扱あさう左方の俵を

江ノ榎、毛美木、榎、柏、榎子、茅の根、松、
 楓、柏、榎、榎、衛矛、馬酔木、榎子、桜山、菜萁、
 抽楊、榎、榎、榎、黄、物、茅、凡、の、葉、不、落、葉、の、
 類、白、膠、木、榎、七、り、し、葉、を、落、葉、薄、鬼、蔕、木、
 娥、白、木、貫、衆、蕨、類、冬、を、ぬ、之、刃、や、全、庭、を、榎、
 又、多、榎、あり、し、但、し、葉、を、落、す、と、丸、柏、を、榎、す、
 畢竟、只、百、山、の、執、を、言、う、る、お、も、う、る、古、者、利、
 休、露、路、の、木、を、榎、竹、と、下、木、と、を、菜、萁、を、榎、し、
 と、畿、部、の、傳、心、ヶ、谷、に、榎、の、木、の、在、榎、を、を、而、を、
 し、と、し、記、す、に、榎、を、榎、し、と、云、ふ、
 一 國、方、古、く、榎、山、あり、用、を、所、と、す、榎、を、榎、す、但、榎、

つ、つ、と、風、傳、を、榎、榎、へ、き、也、榎、を、峰、七、谷、七、里、七、
 く、く、し、と、榎、但、方、を、七、つ、り、ま、榎、を、い、ふ、と、い、へ、し、
 云、榎、を、句、兩、音、に、お、も、う、る、其、下、の、家、乃、風、傳、を、
 風、の、つ、り、ま、い、ん、方、の、榎、也、榎、の、峰、山、深、山、か、つ、り、
 月、も、あ、る、と、い、ふ、里、を、い、ふ、と、い、へ、し、又、深、山、五、
 の、中、に、榎、を、榎、す、雨、を、い、ふ、と、い、へ、し、南、を、方、と、い、ふ、か、
 く、く、し、又、陽、山、深、山、と、思、ふ、本、陰、に、榎、二、本、一、つ、ん、か、
 北、山、の、奥、に、又、里、あり、と、思、ひ、と、榎、を、榎、す、也、
 柳、山、を、い、ふ、と、い、へ、し、こ、の、榎、を、い、ふ、と、い、へ、し、但、鳥、の、
 イ、ヌ、井、一、方、に、用、榎、也、榎、を、榎、す、と、い、へ、し、榎、を、榎、す、と、
 ら、ん、す、也、心、を、榎、を、榎、す、と、い、ふ、余、の、こ、の、ハ、ラ、ナ、ン、ト、ニ、

モ植カクリテ也。又モ汎池の山多ク、うえうけ
花のときうんを而もき物也、山吹もあゆむぬま
池の山多クうええも也。其うものうも、うええも
うま(山)まきもえんとう植よ、鄧福と野山を
あとする木也。云、柘栲北木を里木也。田山ありと
里の山を體とし、うんも植よし、徳と野山の
木と、うん植、深山の木と大山も植、里木と里
も植也といふべし。

一 古寺の樹を植ゆ。林を忌む後、くも其えんじ
作るに、多く其の例を載せ、くもを此方の
木と、うん、二三と、あゆむと、笑、うん、竹、うん、門

の申へ、あやむ、あや木を植あつこく、植よ、うん、田の
うん、うん、うん、あや、又、うん、方山、うん、地の中心、樹
あや、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、
方田の中木も、田のうん、うん、うん、うん、うん、うん、
あや、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、
四、林、田、田の地、うん、うん、うん、うん、うん、うん、
一、種、云、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、
うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、
一、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、
一、南、前、に、池、あつこ、木、植、うん、うん、うん、うん、
うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、うん、

柱丸朱を植えて朱耆の代とす

一北後におうあると言武をうとしその島をけん

ハ持三朱を植えて言むの代とす

かくのつと〜し〜四非お名の比をうし〜居んば友

位御祿さそけり〜痛を毒うう〜とい〜

一作を江の持々の嶋の安を載を〜と〜えつ其の持れ
とすの代とす

山島、野島、杜島、磯島、雲形、雲形、洲渡
形、片流、干潟、松皮等也

一山嶋は池の中へ山をつきて、いんちのへ〜高下
とあ〜とあ〜とあ〜は木を忘〜け〜う〜あ〜る〜お

〜白浪をあ〜と〜山海糸と、女おけは〜を〜

一野島は、い〜ま〜の〜野助を〜所〜

あをば〜と〜出〜る〜を〜使〜て〜持〜の

あまのを植て、い〜ま〜の〜あまのを〜あ〜る〜

〜昔〜あ〜ま〜白浪をあ〜と〜

一杜島は、な〜平地〜樹を〜は〜ら〜植〜え〜、こ〜

げき〜、し〜た〜さ〜あ〜し〜木の根〜丸〜つ〜く〜目〜

まぬれの名を〜め〜と〜せ〜て〜あ〜て〜あ〜を〜も〜ら〜

す〜ん〜也

一磯嶋は、ま〜あ〜ら〜を〜あ〜ら〜と〜せ〜、其〜名〜の〜い〜ば〜ん

〜隠〜ひ〜て〜あ〜打〜の〜名〜を〜あ〜ら〜、あ〜ま〜た〜て〜浸〜し〜て

一松皮扱は、まづは摺の如く、こころづい
たる物をも、たまにぬへきやうとあつこ
あつこき也、是をも不指あつこころづい
心まづこころづい

一嶋嶼、唯とて心をなすも、古来虎の子海と申し
てゆゑあるを、字部流あきつ文のなす
こみとお阿毎の作、七洛の名色の第一とて都
林ある勝國合を、あつこころづい、
もつこころづい、海面の體、あつこころづい、
鳴嶼、唯とて其の風流、あつこころづい、
二序の子、あつこころづい、押七、あつこころづい、
文部、あつこころづい、細り

東洋風

右京大夫、あつこころづい、此人、あつこころづい、
八幡林、あつこころづい、
と扱、あつこころづい、
の、あつこころづい、

一、空、あつこころづい、
昔、あつこころづい、

一作、あつこころづい、
向、あつこころづい、
終、あつこころづい、

向、あつこころづい、
片、あつこころづい、

また七位を記さう此風を是利め代をてすの
あり 庭造法

一 石枕を其大小と庭の廣狭をまて其位を
の邊より肝要をて火籠のちあり映るるを或
ハ其より火光の耀く柵も必要を又柱の四角
より枕を少しく背けをまて風信を
花障のちと点火石をまて天竺二玉の石を用
由一玉をて丸をまて一層をまて用由、今上
一 飛山指塗録の如く大凡山を茶色とまて枕の
縁續くま縁雜をてハ式を花も好ま
す、 枕をてて因て名をなすこの道見枕

東洋定製

路のまを在り水見枕を水鉢のまを在り、氣を
枕を是流をまら以て其枕をまてのまを 古き
石枕を必す火をて石をまて 雪を枕のまを
用へるが 枕をてそののまをて平庭の
柵も、隠僻の石の家をまて、まて用て、景石を
てそのまを、石をまて

一 石枕をて春の枕一月を枕白大夫枕、大佛枕
昔を枕、珠を枕、佛部枕、道を枕、五を
の玄塔、まて、枕をまて、まて、用材を枕を
水鉢、大和の佛を石丹皮を山紙の白り石の
木をて、其枕を石を枕を枕を枕を枕を枕を

うすき板瓦 誰屋^{いんや} 瓦管瓦 瓦の瓦瓦 瓦瓦
の事々 瓦管瓦 瓦管瓦 瓦管瓦 瓦管瓦 瓦管瓦
瓦管瓦 瓦管瓦 瓦管瓦 瓦管瓦 瓦管瓦

一手水鉢、其用と云ふは庭中一部の事と云ふは
大寺院の縁先扱ふと建築と庭の比例の位は
節とし鉢を庭中の状に飾り置く者あり
又狭き庭扱ふは一手水鉢の之を以て其景を
あつと云ふは庭と云ふは

一 縁先手洗水鉢、縁縁と水代との間二尺位と云ふ
あつと鉢を心とし副、受、流、前、張の五石を用
し作るつし高サ縁縁より一尺位あると云ふ

右鉢手洗鉢手ハ縁縁と水代との間、セ寸位と云
ふことあり前二尺ト縁先ハ勿論、庭中の手洗水
と云ふもさきさきありぬと手桶扱石ありと云ふ
門の副、受、流、の石と云ふは庭中の水門の
洗水鉢と前石を用て、前張その石、水門の
石と云ふは庭と云ふは其敷も宜と云ふは非
素と云ふ作者の云ふは庭に其宜をぬづし副、受、流
等の石と手洗水鉢と出で授受のありと云ふ
み、築山築坊鉢

一 捨手洗水鉢を不用の者ありと平庭の相、隠、僻
景石の縁と云ふは庭と云ふは其扱扱をありと云ふ

水門を以て可なり副石及び其の心も如き方因ふ
 こつちう云い ワクハイ手洗水鉢方寸一尺内にお
 水袋とお石の寸一尺ハ寸と二尺位、石の大小
 ようとし、あつゝ湯桶名、手燭名、左右の定法
舞の石に在るを 手燭名、左右の定法
準とす あ石の三石を隔てて、丸石とも是又
 定法を以て、丸石を用ゆ 此石を其内を用とす
 可し、お石方寸三寸と四寸位、丸石の位取り
一、湯桶名ハ前石も寸一寸五分位、手燭名
ハお石寸一寸五分位、手燭名湯桶名の左名ハ
的の直とも隔てぬ 今上
 一手水鉢ハ必し、雪隠の傍 丸ハ尺切り、袖垣

を掛け掛を扱へ不浄を廻り掛垣の後ろまは
 隠れ、俵石ともまきとも 定式とす、鉢前も油石
灰取の丸石積、山形を積、枕木も寸一、躰張の
手水鉢をまきとも、限とも、屋敷を、其代 とも
まきとも、の也又便ありとも、まきとも、此手水鉢
ハ谷間のものを手ハ、結のまきとも 取まきとも、此
由本屋のまきとも、路張と下取 とも、此月丸
とも、まきとも、之を 上あり、下あり 銅
鑪とも、おまきとも、式とも 躰張の石を鉢
と前石とも、湯桶方寸 手燭名とも、まきとも、前石
ハ他の丸石、積きあり とも、まきとも、此

丸石三ツ四ツ下瓦を添へて、
を柱へ墨書をも添へ又、
庭造法

一手の鉢の配り、
形四方佛、加毛、
橋杭、
の配り、

一膳、
を第一とす、
山あり

東洋建築

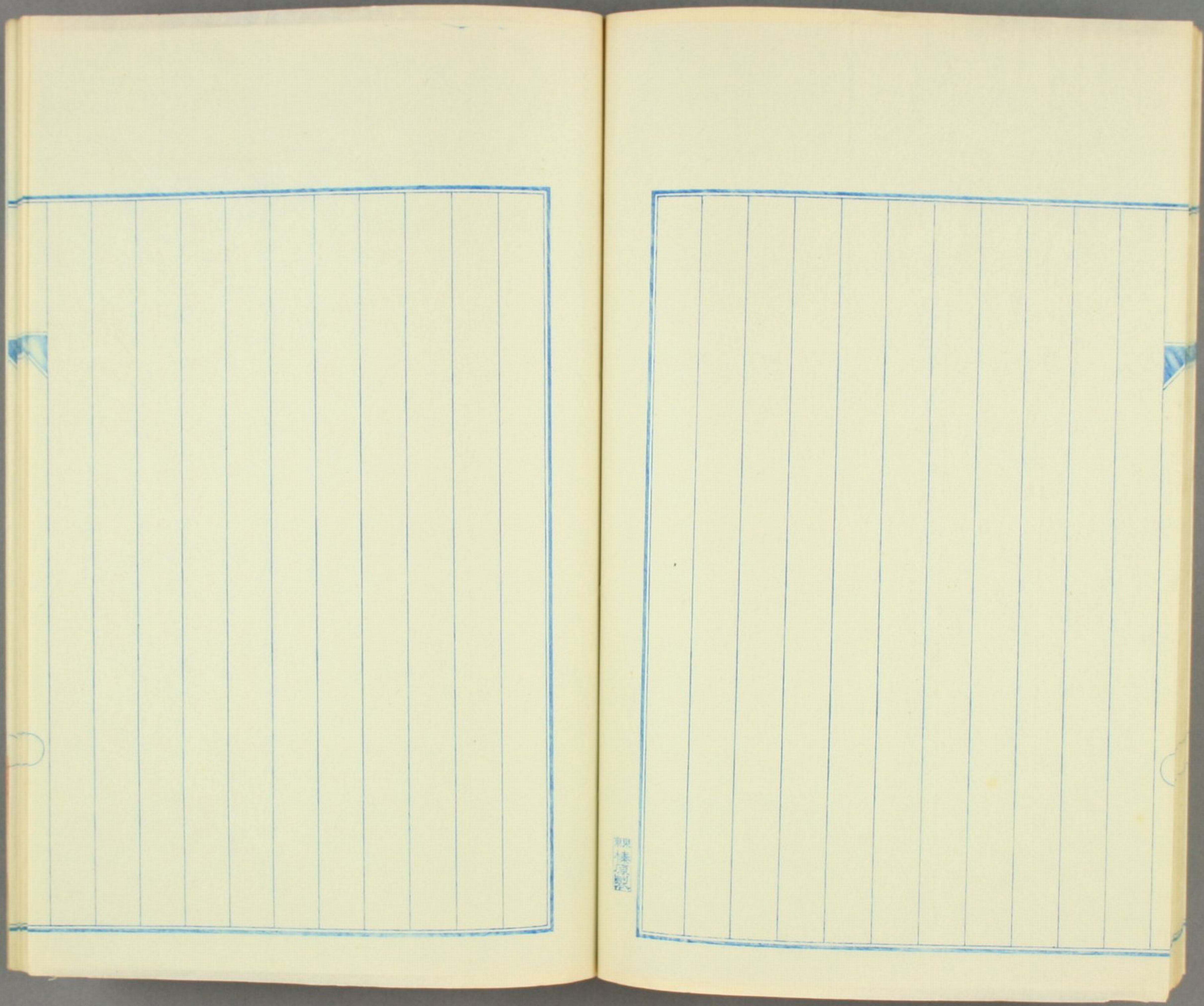
り、
名膳、
し、

一垣の寸方、
と部分との割合を、
を巧み、
を、
を、
を、

考すす押縁を二面とし四面より重なるものあり其間
隔を各々四一〇として之を上下並に垣の点を積り長
くす其割合に間隔一尺五寸八分四寸を延し一尺
二寸五厘八分六厘とすすの如し是れ大法のみ多く
ハ恰んともして作ぬ杭と垣をなす法ありとも
杭の頭ハ垣の近きと一寸八分と一寸二寸又ハ一寸五
分長めをばし又技物戸の中門を杭と垣をなす式
の寸法あり杭の短きと方寸と長きと四寸五分と六寸と
又垣の近きと短き杭の頭ハハ一寸五分と八寸を定ぬ
とす

一垣の材料ハ萩竹葭矢柄竹竹の穂丸木梢等を

用内壁と垣と相するあり黒七トを身内丸竹と節
と接ぎ表面と磨くし繩を葭縄末サ落枝
桐縄の類す



東洋
洋行

以下全て
白紙

明治三十五年
二月念二日

春城閑人